SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

罪深き少年たち

2022年／韓国映画
配給：クロックワークス／124分

2024（令和6）年6月7日鑑賞　テアトル梅田

Data　２０２４－４５

監督：チョン・ジヨン
出演：ソル・ギョング／ユ・ジュンサン／チン・ギョン／ホ・ソンテ／ヨム・ヘラン／ソ・イングク

みどころ

日本でも、『砂の器』（74 年）をはじめとして、「刑事モノ」「犯罪モノ」の傑作はたくさんあるが、韓国はもっと多い。その上、韓国映画には「実話モノ」が断トツに多いが、それは一体なぜ？

本作は 1999 年に起きた、3 人の少年による強盗殺人事件である「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」を基にした実話だが、彼らの冤罪を嗅ぎ取ったファン刑事による“牙を剥く正義”が最大のポイントだ。検挙率ナンバー3 を誇り“狂犬”と呼ばれていた彼が、なぜそんな役割を果たすことに？

彼が“消えた真実“に向けて邁進していく姿はスリル満点だが、一方で韓国警察は本当にここまでの“犯罪デッチ上げ”をしていたの？との疑問も・・・。さらに、弁護士歴 50 年の私の目には、ラストの再審請求の公判シーンのフィクション性＝エンタメ性は如何なもの・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■韓国映画に“実話サスペンス”の傑作が次々と！■□■

世界中で作られている映画の数は膨大だが、それをジャンルごとに分類すると、いろいろな分け方ができる。韓国映画では、「刑事モノ」「犯罪モノ」「サスペンスモノ」が多いが、それらは完全なフィクションもあれば、実話に基づいたものもある。ちなみに、ポン・ジュノ監督の名作『殺人の追憶』（03 年）（『シネマ 4』240 頁）は、華城（ファソン）連続殺人事件に基づいた「犯罪モノ」だった。

私は全く知らなかったが、チョン・ジヨン監督は

①2007 年に起きた「クロスボウ事件」に基づく『折れた矢』（12 年）で、韓国のアカデミー賞と称される青龍映画賞監督賞を受賞し、

②「ローンスターゲート事件」に基づく『権力に告ぐ』（19 年）で、初登場 No. 1 ヒット

を記録した監督らしい。

そのチョン・ジョン監督が本作の基にした実話は「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」。これは、1999 年に、全羅北道（チョルラプクト）完州郡（ワンジュグン）参礼邑（サムレウプ）の「ナラスーパー」という小さな商店に 3 人組の強盗が侵入し、寝ていた 70 代女性を殺害した後、現金などを盗んだとされる事件だが、事件直後に容疑者として逮捕された犯人は、近所に住む 3 人の少年だった。少年とはいえ、強盗殺人事件の犯人として有罪とされた 3 人の少年たちの刑は？

本作は、私の大好きな韓国映画『ペパーミント・キャンディー』（99 年）（『シネマ 45』未掲載）で女優ムン・ソリと共演したベテラン俳優ソル・ギョング扮するファン・ジュンチョルが、長い“島暮らし”（？）の刑事生活から、やっと完州署に戻ることになり、かつての部下たちから歓迎会に迎えられるシークエンスから始まる。ファンはかつて“狂犬”と呼ばれていた凄腕刑事だが、なぜ定年間近の今まで島巡りをさせられていたの？また、古巣の完州署に戻り、「班長」の肩書を与えられたものの、階級は全然上がっていないようだが、それは一体何故？

他方、1999 年の「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」で見事に 3 人の犯人を検挙したチェ・ウソン（ユ・ジュンサン）はその後栄転を続け、今や出世頭として要職に就いていたから、この差は一体ナニ？「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」のことを全く知らない私には、そんな導入部から始まる本作は取っ付きにくそうに思えたが、いや、いや、“実話サスペンス”ならすぐストーリーに入り込んでいけるはず！

■□■チョン・ジヨン監督はなぜ“実話３部作”を？■□■

日本でも冤罪事件や再審請求事件は多い。かつては松川事件、三鷹事件、青梅事件等があり、近時は袴田事件等がある。再審請求が認められるケースは少ないが、それは、何よりも時間的経過を考えれば当然のことだ。警察には犯罪を捜査するためのさまざまな権力が与えられているが、法治国家の下では容疑者や被疑者の人権は保障されているから、当然「適正手続」で守られているはずだ。他方、凶悪犯罪が発生したのに犯人が検挙できず事件が“お蔵入り”してしまえば、国民の警察に対する信頼が揺らいでしまうから、特に殺人事件や強盗殺人事件等の凶悪犯罪には、警察の威信にかけて犯人検挙に向けた捜査が行われるのは当然だ。刑事の執念によって犯人に辿りつき、犯人を検挙する「推理小説」の日本の大家が松本清張だった。彼の小説『砂の器』（61 年）を映画化した『砂の器』（74 年）は、私が邦画の No.1 に挙げる映画だ。他方、犯人検挙のための個々の刑事の努力や警察全体の権威が“一人歩き”し、誤った方向に進んでしまうと・・・？

本作のパンフには岡本敦史（ライター・編集者）氏のコラム『韓国映画が“実話”にこだわる理由』があり、その冒頭には、「現実に起きた出来事、あるいは実在の人物を題材にした作品の多さでは、韓国映画は断トツかもしれない」と書かれている。そして、「ファクト（事実）とフィクション（虚構）を巧みに組み合わせ、「ファクション」と呼ばれる実録

映画を生み出す韓国映画のスタイルは、崔盛旭の著書『韓国映画から見る、激動の韓国近現代史』（書肆侃々房）にも詳しい。」としたうえ、「1999 年に起きた『参礼（サムレ）ナラスーパー事件』の顛末をリアルに映像化しつつ、ある大きな映画的脚色を施している。」とも書かれている。

また、本作のパンフレットの『About Movie』には、①消えた真実、牙を剝く正義　1999 年に起きた衝撃の事件　「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」に基づく、②韓国が誇る名優らによる情熱的な演技の応酬、③『折れた矢』＆『権力に告ぐ』に続く　韓国映画の巨匠 チョン・ジョン監督が綴る実話三部作、と解説されている。これは一般的には“プロダクションノート”と言うべきものだが、チョン・ジョン監督が本作に込めた問題意識を理解するためには、これも必読だ。

これらを読めば、本作は「2000 年の再捜査プロセスと 2016 年の再審プロセスの間を行き来する構造を特徴としている。」ことがよく理解できる。さらに、3 人の少年たちの冤罪を生み出した「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」の問題点とその再審請求のために努力したファン刑事たちの「正義のための戦い」（＝執念）の姿もよく理解できる。

しかし、今年弁護士 50 周年を迎えた私の目で見ると、クライマックスとなる再審請求事件の法廷のシークエンスはあまりにもファクトを無視し、フィクションに傾きすぎ、かつエンタメ色に傾きすぎだ。いくらなんでも、法廷の場はブロードウェイミュージカルの拍手喝采の興奮下で終わるシークエンスとは違うはずだが・・・。

■□■韓国警察は本当にこんなデッチ上げを？■□■

袴田事件の再審請求を巡っては、現在、「血痕のついた 5 点の衣類」が犯行時の犯人の着衣か否かが争われているが、弁護人が主張するように、警察は本当にそんな証拠をデッチ上げていたの？私にはそれがにわかに信じられないが、「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」発生時に、完州署の担当責任者だったチェ・ウソンが、近隣に住んでいた少年たちが犯人だと特定し事件を解決していくサマ（＝自白を強要し、冤罪をでっち上げていくサマ）を見ると、ひょっとして日本でも・・・？と思ってしまう。真実はもちろんヤミの中だが、映画ではチョン・ジョン監督の思い通りの演出が可能だから、本作に見るチェ・ウソンとその部下たちによる冤罪のデッチ上げはひどいものだ。

もっとも、文字の書けない少年に自白の調書を書かせる手口や、現場検証での見えすいたお芝居（？）は、弁護士の私には、本当にこんなものがまかり通ったのか？と疑問に思わざるを得ないが、そこは映画のこと、エンタメ色が加わるのはやむを得ない。ここまでデッチ上げられてしまうと、いくら正義感に溢れたファン刑事が、自分の本来の職分を離れて、過去の「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」にファンを心から慕いサポートする部下のパク・ジョンギュ（ホ・ソンテ）と共に突っ込んでいっても、容易に真実にたどり着けなかったのは仕方ない。ファンが突破口を見出したのは、それまで何度もファンの追及を拒否していた、死亡した被害者の娘ユン・ミスク（チン・ギョン）からある供述を得た

ためだ。それは、彼女がファンからの情報提供によって、彼女が現場で見た犯人の手と逮捕された少年たちの手が同じだと信じていたことが勘違いであり、自分が取り返しのつかない過ちを犯したことに気づいたためだ。

そんなストーリーを次々と描いていくチョン・ジョン監督のストーリー構成力と映像作成能力はさすがと感心させられるものだから、そのハラハラドキドキの緊張感は、あなた自身に体験してもらいたい。

■□■キーマンとなる少年の苦悩は？ファン刑事の居場所は？■□■

スクリーンを見ている限り、「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」の真犯人たちに強盗殺人を決行しようとの意図はなく、当初は単なる物盗り＝窃盗目的だったらしい。しかし、騒がないように母親の口を塞いで物色しているうちに母親の体に異変が起きたから、アレレ、アレレ・・・。イ・ジェソク（ソ・イングク）を中心とする 3 人の少年たちにとって、事件直後に近所に住む 3 人の少年が容疑者として検挙されたのは超ラッキー！だって、彼らが犯人にされれば、自分たちの罪が問われることは永久になくなるからだ。そのため本作では、一方で罪の意識に苦悩し、苛まれながらも、他方で自分の幸せな人生を見つけ出そうとあがき続ける中、今や恋人と結ばれ子供まで授かり、幸せな家庭生活を挑んでいるイ・ジェソクの姿が描かれるので、そんなイ・ジェソクと、「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」の犯人として裁判で有罪とされ、今も刑務所に入っている 3 人の少年たちの姿をしっかり対比したい。

他方、固く口を閉ざしていたユン・ミスクがやっと重い口を開いた頃、かつて全羅北道で検挙率 3 位以内を誇ったベテラン刑事で、一度事件に取り掛かると解決まで食らいついて手を緩めないことから“狂犬”と呼ばれていたファン刑事が“牙を剥く正義”感を貫くため、“消えた真実”の解明に奔走する姿が、完州署にとっても、韓国警察全体にとっても、「こりゃ、まずい！」と判断されたのは仕方ない。そのため、“辞職”を決意したファン刑事に対して、チェ・ウソンは辞職ではなく“懲戒解雇”だと宣言した上、夫を支えながら自らは食堂を営んでいる妻のキム・ギョンミ（ヨム・ヘラン）に対しても営業停止処分を下す、という搦め手からの圧力を加えてきたから大変だ。これによってファン刑事の本来の居場所は完全に奪われてしまったが、本作後半からは韓国警察全体を敵に回しながら、若い弁護士たちと共に「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」で有罪とされた 3 人の少年たちの再審請求のために奮闘するファン刑事の姿に注目したい。

■□■ファンの協力者は？敵対者は？再審請求の行方は？■□■

「参礼（サムレ）ナラスーパー事件」の犯人とされた 3 人の少年たちは長い間、刑務所に収容されたままだったから、ファン刑事から新犯人の目処がつき、再審請求の可能性が生まれたと聞けば、喜んで協力するはず。本来はそうだが、警察でトコトン痛めつけられ

る中で、自白を強要された彼らは、今なお警察から呼び出されて「再審請求に協力すれば、ひどい目に遭うぞ！」と脅迫されると、怯んでしまうことに。そのため、いったんはファン刑事への協力を約束しながら、ある時点でその態度を覆してしまったから、アレレ、アレレ・・・。これではファン刑事は一体何のために自分のキャリアにのみならず、妻の店までも犠牲にして“消えた真実”解明のために“牙を剥く正義”を貫こうとしているの？しかもファン刑事たちが立ち向かっている敵＝警察＝国家権力は強大だ。

そんなファン刑事や 3 人の少年たちに、若くて優秀かつ献身的な女性弁護士がついていることはラッキーだし、悲しみに暮れていた被害者の娘ユン・ミスクも、今やしっかりファン刑事や 3 人の少年たちの再審請求の協力者になっているのも心強い限りだ。ところが、妻には内緒にしておくと約束した上でいったんはファン刑事に協力すると約束したキーマンとなる少年イ・ジェソクが再審請求の公判期日を前に姿を消してしまったから、アレレ、アレレ・・・。ひょっとして彼がファン刑事と交わした約束はカラ約束だったの？そんな馬鹿な・・・！

■□■法廷モノのリアルさは？ラストの法廷シーンに異議あり■□■

「法廷モノ」の最高傑作は、今なお『十二人の怒れる男』（57 年）（『“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』154 頁）。それは、同作ではリアルな人間ドラマが見事に描かれているからだ。もちろん、同作も映画だから、ファクト（真実）とフィクション（虚構）が巧みに組み合わされているが、そこではファクトかフィクションかということの他にリアルさが際立っている。

それに対して、本作ラストで描かれる再審請求の公判シーンは「法廷モノ」のハイライトとしては如何なもの？なぜなら、その法廷シーンはファクトを大きく離れてフィクション一辺倒の描き方になっているからだ。その上、リアルさが極めて薄く、まるでハリウッド初のミュージカル『シカゴ』（75 年）のようなエンタメ色満載の法廷シーンになっているから、私はこれには大いに異議あり！

ちなみに、法廷では裁判長に完全な訴訟指揮権が認められているから、傍聴席から不規則発言が出れば、すぐに「退廷」させることが可能だ。そのため、劇場なら傍聴席からの拍手もブーイングも OK だが、法廷ではそれはあり得ない。ところが、本作ではキーマンとなる少年イ・ジェソクが検察官の想定に反して突然登場してくると、それまでの法廷の優劣が一変！韓国警察による自白の強要や犯行デッチ上げの実態をイ・ジェソクが証言すると、傍聴席で傍聴していたチェ・ウソンらの反応はハチャメチャだ。他方、イ・ジェソクが決定的な証言をすると、傍聴席からはブロードウェイの傑作ミュージカルに感動した観客と同じような拍手喝采が！こりゃ、あまりにフィクションが勝ちすぎているのでは？このエンディングは「法廷モノ」のエンディングとしては如何なもの。弁護士歴 50 年の私はそう思わざるを得なかったが、さて、あなたは？　　2024（令和 6）年 6 月 28 日記